

まるとす会講演 2025年6月30日 20:00-22:00

## 「戦後80年の教会 教会の戦争責任と戦後責任」(レジュメ)

### 1. はじめに(自己紹介)

1947年、愛媛県生まれ、1967年東京神学大学入学、1970年同大学を中退、立教大学文学部キリスト教学科編入・卒業、日本基督教団板橋大山教会、深川教会、東駒形教会牧師を経て、現在、千代田教会牧師、その間、日本基督教団宣教研究所教団史資料編纂室室長(1895~2005年)、農村伝道神学校、日本聖書神学校、東京バプテスト神学校で「日本キリスト教史」の講座を担当。

共編著『日本基督教団史資料集』I-V巻(日本キリスト教団出版局)、『ラクーア その資料と研究』(キリスト新聞社、2007年)、『戦時下のキリスト教』(教文館、2015年)

### 2. 「殉教の覚悟」

「この間にも、教団は統理者富田満と教学局局長村田四郎を中心に、『信仰問答』の起草に心血を注いだ。彼らは文部省の意向を十分に察知していたので、教団を破滅に陥れることのないように「教育勅語」の線まで譲歩する肚を決めてそれを作成した。昭和20年5月、富田満と村田四郎とは、それを携えて文部省に行った。その内容を内示して了解を得るためである。

その草案を見ると、第2問の答えとして『本教団の本領は、皇国の道に則りて基督教立教の本義に基づき、国民を教化し、以て皇運を扶翼し奉るにある』とあり、さらに第4問の答えには『イエス・キリストによって啓示せられ、聖書の中に証示せられ、教会に於て告白せられたる神を信じ、その独子イエス・キリストを救主として仰ぎ、聖霊の指導に従ひ、心を尽くして神と人にと仕へ、以て臣道を実践し、皇国に報ずることである』とある。

教団はここまで譲歩したのであったが、文部省の教学局長は、次の二つの点を指摘して訂正を要求した。すなわち、1. 創造神と天皇との関係 現人神である天皇を、キリスト教の神の披創造者として神とキリストの下に置くことは、天皇の神聖を汚して天皇への不敬となる。天皇の神聖を認めなければ、キリスト教の日本化とは言えない。日本化しない宗教は日本では認められない。2. キリストの復活信仰 復活信仰は幼稚で奇怪な迷信であるから、これを信仰問題から除外せよ。

富田と村田は、もとよりそうした要求に応ずることはできなかった。二人は真実を吐露して信仰の本質から説いてその意味を説明した。そして『私どもは今日まで日本国民として。心から日本を愛し、日本の非常時態勢に即応し協力してきたのだが、信仰の最後の線から退くわけには行かない。そこまで仰有るのでしたら、私どもにも最後の覚悟

があります』という意味のことを言った。その時二人は心の中で殉教を覚悟していた。

教学局長は、その気合いに押されたのか、いくらか折れた形で、『では、こちらも考えておくから、そちらでもよく研究してくれ』と言った。

帰途、二人は『いよいよ殉教かもしれないね』と語り合った。……圧迫は日増しに烈しくなったが、この問題については、文部省からはなんの連絡もないままで終戦になった。』（『東京教区史』）

### 3. 「国民儀礼」のこと

「総発 96 号 昭和 17 年 12 月 10 日

日本基督教団総務局長 鈴木浩二

近来教会ニ於テ礼拝前ニ国民儀礼ヲ実行シツツアル処次第ニ増加シツツアルハ恟ニ喜バシキ事ニ有之候 就テハ今回所属全教会ニ於テ之ヲ実行シ以テ行フ処行ハザル処アルノ不統一ヲ避ケ度ク存ジ候 申スマデモナク皇国民トシテ 大御稜威ノ下ニ生キルコトハ我等ノ感謝感激ニテ有之、我等ノ教団統理者ガ披謁ノ光荣ニ浴シタル此ノ機会ニ、一同感激ノ誠意ヲ披瀝シ之ガ全国的实施ヲ決意致度ク茲ニ御通知申上候」

### 4. 第二次大戦下における日本基督教団の責任についての告白

「わたくしどもは、1966年10月、第14回教団総会において、教団創立25周年を記念いたしました・今やわたくしどもの真剣な課題は『明日の教団』であります。わたくしどもは、これを主題として、教団が日本及び世界の将来に対して負っている光荣ある責任について考え、また祈りました。

まさに、このときにおいてこそ、わたくしどもは、教団成立とそれにつづく戦時下に、教団の名において犯したあやまちを、今一度改めて自覚し、主のあわれみと隣人のゆるしを請い求めるものであります。

わが国の政府は、そのころ戦争遂行の必要から、諸宗教団体に統合と戦争への協力を、国策として要請いたしました。

明治初年の宣教開始以来、わが国のキリスト者の多くは、かねがね諸教派を解消して日本における一つの福音的教会を樹立したく願ってはおりましたが、当時の教会の指導者たちは、この政府の要請を契機に教会合同にふみきり、ここに教団が成立いたしました。

わたくしどもはこの教団の成立と存続において、わたくしどもの弱さとあやまちにもかかわらず働かれる、歴史の主なる神の摂理を覚え、深い感謝とともにおそれと責任を痛感するものであります。

「世の光」「地の塩」である教会は、あの戦争に同調すべきではありませんでした。まさに国を愛する故にこそ、キリスト者の良心的判断によって、祖国の歩みに対し正しい

判断をなすべきでありました。

しかるにわたくしどもは、教団の名において、あの戦争を是認し、支持し、その勝利のために祈り努めることを内外にむかって声明いたしました。

まことにわたくしどもの祖国が罪を犯したとき、わたくしどもの教会もまたその罪におちいりました。わたくしどもは『見張りの使命』をないがしろにいたしました。心の深い痛みをもって、この罪を懺悔し、主にゆるしを願うとともに、世界の、ことにアジアの諸国、そこにある教会と兄弟姉妹、またわが国の同胞にこころからのゆるしを請う次第であります。

終戦から 20 年余を経過し、わたくしどもの愛する祖国は、今日多くの問題をはらむ世界の中にあつて、ふたたび憂慮すべき方向にむかっていることを恐れます。この時点においてわたくしどもは、教団がふたたびそのあやまちをくり返すこと泣く、日本と世界に負っている使命を正しく果すことができるように、主の助けと導きを祈り求めつつ、明日にむかっての決意を表明するものであります。

1967 年 3 月 26 日 復活主日

日本基督教団総会議長 鈴木正久

#### 【参考文献】

日本基督教団宣教研究所編『日本基督教団史資料集』Ⅰ－Ⅴ（日本キリスト教団出版局、1997－2000 年）

戒能信生「日本の教会の戦争責任」金子啓一編『講座現代キリスト教倫理 3 日本に生きる』所収（日本キリスト教団出版局、1999 年）

戒能信生「日本基督教団の場合」日本キリスト教史学会編『戦時下のキリスト教』所収（教文館、2015 年）

戒能信生「戦争責任告白はいかにして成立したか 教団史におけるその歴史的検証」『時の徴』同人編『日本基督教団戦争責任告白から 50 年 その神学的・教會的考察と資料』所収（新教コイノニア 33、新教出版社、2017 年）

戒能信生「戦時下説教の実像」富阪キリスト教センター編『協力と抵抗の内面史 戦時下を生き残ったキリスト者たちの研究』所収（新教出版社、2019 年）